中 嶋 中国の政治潮流の変化は大き

民日報』編集部論文「滅亡寸前の

たのであり、一連の事実からすれ

った昨年の今ごろと比べるとき って表面化した中国共産党中央の 読んだ鄧小平が、その葬儀の日以 の論文や記事もほとんど出ず、暗 恩来首相の一周忌であったが、亡 来、政治の表面から姿を消してい に周恩来路線の継承を誓う弔辞を のに『人民日報』には周恩来追悼 相の再復権を強く求めるにいたっ って中国社会の基底を流れ、さら 状況はまさに隔世の感がある。 き周恩来を追慕する民衆の心の値 さは、いまや新しい政治潮流とな ている。

世紀の

宰相の死であった に広まって失脚した鄧小平・副首 昨年九月九日の毛沢東の死をま

く、また速い。この一月八日は、周 なかったことに示されるように、 派」批判がいささかも根づいてい たのであったが、昨春来の「走資 したものだとされている)を武器 どおり事をはこぶ」との<遺嘱> 組」は、毛沢東死後、「既定方針 歴然とする。たしかに、「四人 狂気のあがき」を読めば読むほど に、急拠、党中央を固めようとし (それ自体、「四人組」が改ざん 文化大革命の中心的な担い手であ なんといっても「四人組」こそ、 ではあったが、しかし、一方では 幹部にとっても歓喜すべき出来事 組」打倒は中国民衆にとっても党 った存在であったので、「四人 はむしろ華国鋒の側にあったので り、「四人組」は大衆から浮き上 はないかとの疑念を誘う。もとよ ば、極限状況におけるルール違反

> い数々のつながりをもっていた」 会議での華国鋒演説)とか江青夫 石国民党反動派と切っても切れな こととなる。「四人組」は「蔣介 (「農業は大寨に学ぶ」第二回全国

「映画フィルムだけでもトラック 会議にやってきたとき、彼女は んだ「紅色女郎」(『人民日報』十 人は三〇年代から国民党が送りこ 二月五日)だったとか、さらに、 昨年九月、江青夫人が大寨農業

△「どうでもよい」の意∨という 調子である。 民日報』十一月十四日)といった ひどい詩を口ずさんでいた」(『人

の写真と並んで華国鋒の写真や肖 のだが、一方では華国鋒への英雄 や文章かと思われる表現がますま 崇拝が高まり、どこにでも毛沢東 りこれが社会主義国の公式の言葉 すどぎつくエスカレートしている 「四人組」批判にかんするかぎ

人であったばかりか文化大革命以 江青夫人は三十年間も毛沢東夫 彼らを処断しなかったのか、なぜ 降は党中央の要職についたのか、

できる地方放送などは、四川、福 といった疑問を感ぜざるを得ず、 事管制下にあるらしいことは否め 中国はかなり広範囲にわたって軍 ないことを示唆しており、今日の 理をいまだ見出し得ないでいる。 は、このような疑問に耐え得る論 承をしきりに強調する華国鋒政権 建、湖北、広東、遼寧などの各省 での混乱が決して過去のものでは 「毛沢東思想」と毛沢東路線の継 そのような折しも、外部で傍受

以後四カ月に近いというのに、依 然として党中央委総会さえ開かれ このような状況こそ、北京政変

能を果たし得ないでいる。 英の二名のみであり、政策決定機 員会は、依然として華国鋒と葉剣 はいないものである。一方、最上 との大きな背景であろう。たしか 層部としての党中央政治局常務委 的にはなんら大きな意味をもって トであることが示すように、政治 十二名も副委員長が存在するポス っても、このポストはもともと 問恩来夫人の鄧顯超女史が全人代 たが、これらの会議は、たとえば ぶ」第二回全国代表会議が開かれ れ、下旬には「農業は大寒に学 体制は認知されていまだいないと 常務委副委員長 に任命されたとい 人民代表 大会常務委員会 が開か に、この間、十二月上旬には全国 人民代表大会などによって華国鋒

どのような かたちで 復活するの 鄧小平の路線はいまや完全に勝利 り、天安門事件の「反革命分子」 すると路線的に勝利した鄧小平が 在こそ、鄧小平だと推測してお したといってもよいだろう。だと 影」がますます色濃くなってきて いる。私は、一連の事態の陰の存 そのようなとき、「鄧小平の

ることになる。 の党中央の決定に彼自身参与して いるだけに、鄧小平の全面的復権 一副主席となった天安門事件直後 子」として断罪し、みずから党第 としては、鄧小平 を「反 革命分 て有力な指導者であるが、華国鋒 行政面でも党組織の面でもきわめ 軍のなかにも根強い基盤をもち、 うに思われてならない。鄧小平は 権も鄧小平自身が保持しているよ あり続けるのか、等々、その決定 か、依然として当分は陰の存在で

ず、ましてや党大会ないしは全国 平としては、ソ連との関係をより 権すれば、「四つの現代化」路線 がって 実権派の 立場からの「理 合理的かつ冷静な関係へと改善し 性的な反ソ主義者」でもある鄧小 であろうが、同時に、毛沢東とち への道を本格的に歩むようになる は大胆に推進され、中国は工業化 もとより、鄧小平が全面的に復

ようとするかもしれない。

和友好条約に異存のあろうはずは のなら、もとより、当面の日中平 足る安定性を保持しているという 末永くわが国が同盟関係を結ぶに うのなら、また、華国鋒の中国は そのような荒波を中国とスクラム を結んで乗り切る用意があるとい は、決して平穏ではあり得まい。 平和友好条約をわが国が締結した とき、わが国をとりまく国際環境 環としての「覇権条項」入り日中 のなかだけで中国の対ソ戦略の 欠いたまま、日中関係という視野 ばなるまい。このような展望さえ ては、その帰避を十分に見定めね く動こうとしており、わが国とし リカの中国政策をもはや一般論と して中国をめぐる国際環境は大き て促進させることになろう。こう してではなく、具体的な政策とし このような可能性の存在はアメ

えないのである。 字成熟しているとはいささかも思 ない。だが、それだけの条件がい



末端ないしは中間の単位を掌握し 生産点や党、政府および軍機構の は、結局のところせいぜい『人民 ていない「四人組」に可能なこと 11

であり、「一触即発の状態にあっ

か食われるか」の状況にあったの

会主席就任を決議したのである。

権力の中枢は、まさに「食う

中心は党と国家権力のさん奪にあ る」)のである。従って、このよ 報』社説「『四人組』のねらいの た(十二月二十二日付『人民日 ることぐらいであった。 なプレス・キャンペーンを展開す 日報』など彼らが握っていたマス ・メディアを動員して先制攻撃的

うなとき、一挙に北京政変が起っ とはかったのであったが、そのよ を発動して自己の立場を固めよう こうして「四人組」は大衆運動

のであり、そのことは、政変の経

国鋒のクーデター(傍点筆者)な

線を詳述した十二月十七日付『人

うな北京政変の本質は、やはり華

あったという 事実は 消去できな

といわねばならない。こうして、 に一挙に彼らを打倒したやり方を 団結―批判」ないしは「闘争―批 国鋒としては、いきおい「四人 自己の正統性の原理に苦慮する華 判一改革」の毛沢東方式をとらず 説得的に正当化する根拠に乏しい 華国鋒 にとって は、「批判」

り、毛沢東にもっとも近い存在で 演説する華国鋒主席 (新華社―共 同

組」の「旧罪」を激しく暴露する るとも、視ること等関のごとしい ドに寝そべって『山崩れ、地裂く

青夫人らだけは「特製の防震ベッ 夏の河北大地震のとき、みなが抗 週報』七六年第四十六号)とか、昨 映画にうつつをぬかした」(『北京 震救災活動に励んでいるのに、江 じこもって輸入もののエロ・グロ 台分も運びこみ、毎晩部屋にと

華国鋒体制の内在的危機感の反映 であるのなら、なぜもっと早くに れほど「四人組」が悪らつ(辣) であり、一方、中国の民衆は、そ 像が出まわりはじめている こうした最近の状況は、やはり

(東京外語大助教授)